

# 順正寺報第27号

## ウラボン法要御案内

初盆を迎えられるにあたって

⊗ご自宅のお内仏へ出向しての初盆供養

恒例により、初盆は七月上旬より繰り上げてお勤め申し上げます。

ご希望の方はご連絡ください。

⊗白張ちょうちん一張を、デパート等で求めの上、一日から十六日まで仏前に、天井から吊して頂き十六日に寺へお納め下さい。

⊗迎え火・送り火は適当にお考えの上、焚いても焚かなくともどちらでも結構です。

⊗精霊棚やナス・キュウリに箸の足を付けて飾るなど unnecessary です。

仏具はおみがきをし、花・供物を平生より丁寧な荘厳すれば十分です。

以上

死は娑婆しゃばの常とは知りながら、自身に直面された時、愛別離苦の悲しみ、更に「誰モ代ル者ナキ一人」の痛み、苦悩を体感なされ、一声の称名念佛へと御心向けの御事と拝し上げます。

さて、当山・順正寺では、次頁の通り、送り盆の十六日夜、盂蘭盆（ウラボン）総経供養の一座をお勤め申し上げます。

叫喚きょうわん・焦熱しょうねつにも似た日暮らしのさなか、浄土の清風に触れ、ひとときを御先祖の徳と仏恩の深きことに思いをいたされる様念じつつ御案内申し上げます。

住職

ウラボン総経供養の

詳しい御案内は次の頁です。

『ウラボン会』 総供養

日時 七月十六日 (火)

午後七時ヨリ

場所 順正寺本堂

総経供養一座  
法話一席  
以上

御家族、お友達、等々、お誘いして、にぎにぎしく御参詣下さり  
ます様、万障繰り合わせの上、お願い致します。△口 堂手

ご自宅のお仏壇の前での読経供養をご希望の方は、ご連絡ください。  
い。七月のお盆は、件数が多く回り切れないため、迎え盆の七月十  
二日。から十六の間とさせていただきます。この間は、ま  
こと。に勝手が、間と希望の日時に沿うことができません。この間は、ま  
り。ます。が、八月三日から八月十一日までお盆参りを受け付けています。  
一日。から八月十一日までお盆参りを受け付けています。

江口 智流

先日、33になった。誕生日が来ていきなり33になったようだが、32から33になるまでには、月日の積み重ね、時間のたゆまぬ経過があったのであり、その間ずっと自分なりに、ある部分では成長し、ある部分では衰退してきた。生れてからずっとそうして生きている。そういう積み重ねの上での33年である。

しかし、それでは、33年以前は、なにも無かったのかと言うと、とんでもないことで、両親があった。祖父母があった。ずっとずっとさかのぼれば、地球の誕生、宇宙の誕生があった。それがなければ、自分は絶対に存在しない。そう考えると、自分の33年は、宇宙の誕生から始まった、受け継がれてきた歴史の上で初めて成り立つことのできる33年なのである。このままいくと、いよいよ何が言いたいのか自分でも解らんようになってくる。だから話をもう少し現代に戻す。

先日、住職と一緒に法事に出かけた。いや、寺であった法事だった。その時のことである。若い人が数人いた。従兄弟同士だったか、兄弟だったかは忘れた。その若者に住職が尋ねた。

『親は一親等。それじゃ、従兄弟同志は何親等かな。』  
『四親等。』と答えが返ってきた。

そのとき私は頭の中に家系図を作り数をふっていた。そして、三親等と、答えを出していた。「フフフフフフ：間違ったな。」私は心の中でほくそ笑んだ。が、その時、

『その通りだね。』と言う住職の声。

「なに！四親等だというのか。」衝撃が脳天を貫いていく。「ウ、ウソダー！親が一親等、兄弟が二、祖父母が二、お・叔父叔母が三：そ、そうかー、叔父叔母の子供であるのだから、い・と・こは、四親等だったのだー」私は破れ去り、立ち上がれなかった。（本当いうと、最近めっきり太ったもので、足が痺れてどうにも立てなくなっていた。）とにかくいらんことをいわずに、黙っていて良かった。話を戻す。

『四親等。』

『その通りだね。』

エライ。良く、すっと答えられるものだ。

『その従兄弟の名前、だいたい言えるかな。』

『ハイ』

「へへへ：それなら俺にもいえるぜ。」私は今度こそ自信に満ち溢れていた。

『そうだろうね。』

ガクッ。そうか、まだ先があったのか。

『それじゃ、縦の四親等の人のうち、一人でも言えるかな。』

『エッ？』

ゲゲッ、そういう事だったのか。

『いいかい。従兄弟というのは、叔父さん叔母さんの子供、言うなれば横のつながり。縦の四親等、つまり、父さん母さんが一親等で二人、お祖父さんお祖母さんが二親等で四人、ひいお爺さんお婆さんが三親等で八人、

そして、その八人のおやにあたる人達が四親等で十六人。その十六人のうち一人でも言えればたいしたもんだ。どうかな？」

『言えない。』

「俺も言えん。」

『ところがだ、君達がまったく知らないその人達のうち、一人でも欠けていたら、君達はこの世に生まれてこられなかったということ。君達の両親もだ。』

そこなのだ。自分のまったく知らない先祖が、命を繋げてきてくれたればこそ、今、私は私として生きていられるのだ。

世界中に文化遺産だの、なんやかんや多くの先達の残してきてくれた『血と汗の結晶だ』と言われるようなものがある。しかし、何よりも、づつと残してきてくれた、『血と汗の結晶』と言える真実のものは、この『私の命』である。

コマーシャルで、「ご先祖さんは大切にせなあかんのよ」というている。大切なのは解る。しかし、大切にしなければならぬという義務感で接してもしょうがない。というよりも、大切に大切に命を育み、伝えてきてくれたのが先祖。その大切さを伝えてきてくれたのも、大切にしてくれているのも先祖のほうであり、どうも立場が逆なような気がする。そういう所に立って考えると、大切なものは、伝えられてきた『私の命』である。その伝えられた命を、私が大切に育んでいくことが、一番大事な

ことなのである。

さて、ここまでかいてきて私は大きなミスに気付いた。なんと、私は今回このようなことを書く予定はまったくなかったのだ。実際は、私と芝居について書くことで、何か自分の思いのようなものを間接的に伝えるという、かっこ良い方法を取る予定で書き出したのだ。が、前振りのつもりでちょっと書くはずのことが本題となってしまう、挙げ句の果てに、最近、法事等で、話していることを書いてしまったので、非常に困っている。この話とこの話はもうできない。せっかく親父から仕入れたばかりなのにこの手も使えない。あー、もう、また何か仕入れにゃならん。

私は、勉強が嫌いだ！と、いってても始まらない。ヨシッ！ニュース、ワイドショー、ドラマ、スポーツ。なんでもみるぞー。

私はテレビが好きだー！

♪ケセーラーセラー、成るように成るさ♪

了

〒177 東京都練馬区石神井町三の十七の四

TEL 03 (39996) 2064

FAX 03 (39997) 8117

順正寺